

小児の尿路奇形に関する研究 —偶然の機会に発見された尿異常者における 尿路奇形を中心に—

京都大学小児科 奥 田 六 郎
藤 澤 長 一

研究目的

最近、学童生徒の集団検尿の全国的実施と検尿試験紙の普及にともない、偶然の機会に尿異常を発見され小児科を受診する症例が多い。しかも、これらの症例の中に偶々 IVP にて尿路奇形が発見される場合もみられる。今回は、これら尿路奇形の種類と頻度をしらべると共に、尿異常との関連の有無について検討することを目的とした。

研究対象

昭和47年から54年までの8年間に偶然の機会に尿異常を指摘され京大小児科外来を受診した症例は、約400例であるが、そのうち腎生検その他の精査を希望して入院した134例を主な研究対象とした。なお、この間に入院した溶連菌性急性糸球体腎炎28例、特発性ネフロー

ゼ症候群37例および紫斑病性腎炎25例についてもしらべた。立位 IVP 写真は、全例には行っていないので、今回は遊走腎の有無の検討は省略した。腎下垂とは、腎盂の中心が第Ⅲ腰椎以下のものと定義した。

研究結果

別表1、2に示す如く、尿路奇形として重複尿管腎盂7例、腎下垂3例、発育不全腎1例および馬蹄腎1例がみられた。そのうち、多くみられたのは、不完全重複尿管腎盂と腎下垂であり、腎下垂は偶然の機会に尿異常を発見された134例中3例(2.2%)に、不完全重複尿管腎盂は、紫斑病性腎炎19例中2例および偶然の機会に尿異常を発見された134例中4例(3.0%)にみられた。不完全重複尿管腎盂はいずれも Y-type のものであり、左右差はみられなかったが、6例中1例のみが男児で、

表 1 尿路奇形の種類および頻度

症 例	例 数	I P V を 実 施 し た 例 数	尿 路 奇 形											
			完全重複尿管腎盂			不完全重複尿管腎盂			腎下垂		発育不全腎		馬蹄腎	
			右	左	両側	右	左	両側	右	左	右	左		
急性腎炎	28	20										1		
ネフローゼ症候群	37	37			1									
紫斑病性腎炎	25	19				1	1							
偶然の機会に 発見された	蛋白尿および血尿	75	75				1	1						
	血 尿	持続性	36	36					1	2				1
		反復性	10	10										
	蛋白尿	持続性	7	7				1						
起立性		6	6								1			
合 計	224	210	0	0	1	3	3	0	2	1	1	0	1	

表 2 尿路奇形の認められた症例

氏名	年齢	性	臨床診断	尿路奇形	腎組織所見*
新○宏○	8	男	急性腎炎	発育不全腎(右)	施行せず
本○義○	2	男	ネフローゼ症候群	完全重複尿管腎盂(両側)	〃
林○子	6	女	紫斑病性腎炎	不完全 〃 (左)	巣状分節性腎炎(軽度)
脇○美○	9	女	〃	不完全 〃 (右)	〃 (中等度)
小○章○	8	男	遷延性腎炎	不完全 〃 (左)	メサンギウム増殖性腎炎(軽度)
中○敬○	12	女	〃	不完全 〃 (右)	〃 (中等度)
杉○真○子	5	女	〃	腎下垂(右)	〃 (軽度~中等度)
西○雅○	10	男	〃	〃 (右)	施行せず
中○由○	7	女	無症候性血尿	不完全重複尿管腎盂(左)	メサンギウム増殖性腎炎(軽度)
福○敏○	8	男	〃	馬蹄腎	施行せず
福○美○紀	11	女	無症候性蛋白尿	不完全重複尿管腎盂(右)	微小変化
高○敏○	13	男	起立性蛋白尿	腎下垂(左)	微小変化

* 腎生検は尿路奇形のない側の腎について行った。

他の5例はいずれも女児であった。尿路奇形の有無と患児の臨床経過、尿所見あるいは、その他の検査所見との間に、何らはっきりした関連は認める事が出来ず、また腎生検所見(光顕、蛍光および電顕)との間にも関連は認められなかった。

考 按

Campbell は、剖検 51,880 例のうち 241 例 (0.5%) に不完全重複尿管腎盂が、0.2% に完全重複尿管腎盂がみられたと報告し、Mordmark は IVP 施行例の小児の 2~4% に重複尿管腎盂がみられたと報告している。女児に多くみられるという。学童・生徒の集団検尿異常者にみられる尿路奇形の詳細な分析の報告はないが、北川らは、92 例中馬蹄腎 2 例、重複腎盂 2 例を報告し、山

下らは、199 例中重複尿管腎盂が 4 例 (2.0%) にみられたと報告している。今回の研究結果でも、尿路奇形の頻度は低く、尿路奇形は尿異常者に偶然に存在する奇形にすぎず、尿異常の明らかな原因とは考えにくい所見であった。

結 語

偶然の機会に発見された検尿異常者を中心に、尿路奇形の種類および頻度についてしらべた。もっとも多くみられた奇形は、不完全重複尿管腎盂であり、偶然の機会に発見された尿異常者 134 例中 4 例 (3.0%) にみられたが、発見頻度は低く、しかも尿異常を来たす原因と考えられる明らかな根拠は見出し得なかった。

尿道下裂に関する

I 疫学的研究・II Microsurgery を利用した新しい Y-Flapurethroplasty の臨床的ならびに組織学的研究

慶応義塾大学泌尿器科 木 村 哲
田 崎 寛

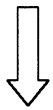
I. 疫学的研究

本邦に於ける、尿道下裂の広域同時調査が未だおこな

われていない現状であるため、試みに、外来患者を対象とした、本症の頻度を都市部と農村部の 2 施設で、昨年



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

最近,学童生徒の集団検尿の全国的実施と検尿試験紙の普及にともない,偶然の機会に尿異常を発見され小児科を受診する症例が多い。しかも,これらの症例の中に偶々IVPにて尿路奇形が発見される場合もみられる。今回は,これら尿路奇形の種類と頻度をしらべると共に,尿異常との関連の有無について検討することを目的とした。